

黒い肌の「異人種」との遭遇

―「黒人身体能力神話」浸透度の文化的格差をさぐるための序論的考察として―

川島浩平

序にかえて―「黒人身体能力神話」を比較文化的に考察する

サッカーW杯やオリンピックなどのメガイベントに象徴されるように、スポーツは民族的、国家的な境界を超えて、多種多様な人間集団間の接触を促す活動として著しい発展を遂げてきた。その過程で、世界各国の政治家や資本家、あるいは広告などのサービス産業に従事する企業人から熱い注目を浴びてきたことは周知のとおりである。他方、スポーツ社会学者をはじめとする研究者の厳しい視線に晒されてきたこともよく知られている。

元来スポーツの国際行事を主催・推進する側には、スポーツで流す「汗と涙」による交流が深いレベルでの相互理解をもたらし、国際平和の礎を築くだろうとの想定が存在していた。しかし実際には、こうした安易な期待はたびたび裏切られる結果となった。スポーツは、異文化理解よりはむしろ相互のステレオタイプ化をもたらし、選手間や視聴者間あるいは選手と視聴者間の実質的な絆を強化したというよりはむしろ、短絡的な判断・解釈や偏見・差別意識を醸成する機会を提供することの方が多かったとの批判が相次いでいる。学界が注視してきたのも、それぞれの場合の後者、つまりネガティブな影響の方である。

こうしたネガティブな影響をもたらした原因の最たるものの一つに、「黒人身体能力神話」がある。別の機会にその意味については詳しく論

じたので、ここでは「科学的根拠がないにもかかわらず、黒人に固有の運動能力があるとする想定」と定義するだけに留めておく。^①この神話は、アメリカ合衆国（以下アメリカ）において、多くの論者が指摘してきたように、アフリカ系アメリカ人（以下「黒人」を同義で用いる^②）に、自己の身体およびその能力を過信させ、それゆえ他の「人種」^③に対する優越意識を育み、プロフェッショナル・アスリートとしての可能性に現実離れした期待を抱かせ、反面、本来ならより確実な社会・経済的成功の基盤となるべき勉学を軽視させ、敵視さえさせる事態を招いてきた。黒人身体能力神話は、アフリカ系アメリカ人コミュニティにおいて、人口比率をはるかに上回る比率で中等教育からの落伍者や中退者を生み出す要因の一つと見なされて現在に至っている。^④

以上に述べた一連の現象を調査するため、私は平成二〇年度から武蔵大学総合研究所プロジェクトA（研究テーマ…アメリカ合衆国における運動能力・身体能力の人種間格差に関する言説・表象とその社会的影響）に着手した。同時に、科学研究費補助金による基盤研究C「アメリカ合衆国における黒人身体能力神話およびスポーツへの固執と対抗言説・戦略」も立ち上げた。両者は相互に関連しているが、敢えて区別するならば、前者が神話の受容と批判の拮抗関係が及ぼす社会的影響に焦点を当てたのに対し、後者は、批判側の対抗言説・戦略が、神話をいかに覆そうとしているかを分析することをねらいとするといえる。

ここに概略した二つのプロジェクトは、黒人身体能力神話による言説と表象に係わるアメリカの環境を対象とするものである。この環境を太平洋のこちら側から見据えている私たちは、同じ現象に関する日本側の立場と状況を、自ずと意識することになる。そこで気付かされるのは、神話の浸透が日本においてむしろ徹底しており、また無批判に受容されているという現実である。それゆえ、日本側の立場と状況を精査することは、比較文化的視座を構築することによって、神話のより広くさらに深い理解を促し、二つのプロジェクトを推進するための足場を固める作業になるものと考ええる。本論は、神話の分析にあたって、以上のような比較文化的検討が有効であるとする立場から、別稿でおこなった概念規定と方法論を踏まえつつ、「序論的考察」を試みることを目的とする。

「序論的考察」としたのは、日本における黒人身体能力神話の浸透を検証するための準備的作業として、日本人と「黒い肌の『異人種』との遭遇」の様態と度合を明らかにすることが有意義であると考えるところである。ここで問われるべきは、次のような点である。(協力を得た日本の大学生たち) インフォーマントは、これまで／現在、黒人とのような関係(ここでは「関係」を、後の節で説明する諸段階、「見かける」、「会う」、「話をする」、「知人になる」、「友人になる」、「親戚・家族になる」などを包含する広い意味で用いている)にあった／あるのか、あるいはより正確にいうなら、あった／あると記憶しているのか(以下同じ)。⁵⁾ インフォーマントは、「もともとスポーツがうまい」、「生まれつき運動が得意」、「天賦の運動能力や身体能力に恵まれている」、「天性のアスリートである」などの言説に象徴される「黒人身体能力神話」の主人公である人々と、実際にはどのように「リアルな」⁶⁾ 体験をしてきたのか。イン

フォーマントは、その体験を通じて、どのような印象、感情、意見を抱いた／抱いているのか。接触・交流の様態・度合と、印象・感情・意見との間に関連はあるのか、あるとしたらそれはどのようなものか。そしてリアルな体験による印象・感情・意見は、ステレオタイプを裏付けるのか。

結論を先取りして言えば、実際の経験は多様性と変化に富み、必ずしもステレオタイプを裏付けるものではなかった。それゆえ当然のごとく、次の疑問が浮かび上がる。ステレオタイプの典型ともいえるべき黒人身体能力神話は、いかに、そしてなぜ浸透してきたのだろうか。本論は、リアルな体験を照射し、「神話なき」世界の真相を描き出すことによって、日本で現実を展開した、そして展開している、異なる人種間の接触と交流の本来の姿を追究することを目的としている。この作業を通して、ステレオタイプの問題性、もう少し踏み込んで言えば、その誤謬を明らかにし、その差別性を指摘しながら、ステレオタイプが浸透する構造と過程を解明する必要性を強く訴えたい。本論を「序論的考察」とするのはそれゆえである。

1. 「遠い国」のアフリカ人と「報道の華」アフリカ系アメリ リカ人

アフリカ研究者はこれまで、研究書や概説書において、アフリカという大陸とそこに位置する国々や文化圏の知名度の低さを嘆いてきた。アフリカ史概説書の代表格ともいえる『新書アフリカ史』の冒頭で二名の著者は、「日本人にとってアフリカは遠い大陸である」と述べ、日本との関係史を著した二名の研究者も、「われわれ日本人の多数にとり、ア

フリカは依然として『未知の大陸』であり、第二次世界大戦以前のステレオタイプのアフリカ観を払拭できずにいる」と宣言している。⁷ 今世紀に入ってから、同じ調子の主張が繰り返されている。日本の新聞におけるアフリカ報道を粗上に載せた研究書は「たぶん昔も今も最も関心の薄い地域であるに違いない」との、やや推測めいた観察が始まるが、巻末で「一つの結論めいたことだが、日本における『アフリカ報道』は、その質・内容においては、戦前・戦後を通じて大した変化はないということである。それは取りも直さず、それだけ距離的に遠く、また心情的にも距離があるということを現代においても物語っているのである」と結び、近代・現代日本におけるアフリカ観の連続性さえほのめかしている。⁸ 日本の政界・財界の対アフリカ政策を包括的に検討しようとする意欲的な最新の著作も、その巻頭に「多くの日本国民にとって、アフリカは長い間、遠い遠い国であった」との評価を据えている。⁹ アフリカ関係書に流れるこうしたモノトーンは、嘆きというよりも、ある種の諦観のような響きを読者に伝えるかもしれない。

知名度の不足以外に、研究者は、この大陸とそこに住む人々に対する軽視や蔑視の潜在や顕在を、日本の伝統的なアフリカ観の特徴として指摘してきた。明治国家を代表する啓蒙家である福沢諭吉でさえ、ヨーロッパ諸国と合衆国を「最上の文明国」、トルコ、中国、日本を同格と見なして「半開の国」と呼ぶ一方で、アフリカを「野蛮の国」と決め付けていた。「文明開化」の時代きつての文化人であっても、アフリカに対する因習に縛られていたといえるだろう。

こうしたアフリカ評は、現代の中等教育の教材にも息衝いているようである。ある研究者は、教科書の多くが「ヨーロッパに住む白人の集団

を『民族』と、「アフリカに住む集団を『部族』と」記述してきたと主張する。この研究者は、こうした慣行がヨーロッパを「文明」と、アフリカを「未開」とする基準に由来すると推測し、それゆえ若い世代の人々に、「部族と呼ばれる集団は未開である。したがって、部族と呼ばれるアフリカ人は未開人である」という印象を与えていると論じている。¹⁰ 同じ研究者は、別の調査結果も報告している。地域の名称を聞いて連想する言葉を挙げさせると、アフリカの場合上位五番目までが、「砂漠」、「黑人」、「アパルトヘイト」、「飢餓」、「貧困」となり、過半数がネガティブなニュアンスの伴う言葉で占められるという。これは、ヨーロッパ、アジア、アメリカ、オセアニアなど、他のいずれの地域にも見られない現象である。¹¹ 日本人のアフリカに対する態度を知るには、アフリカ系アメリカ人研究者ジョン・ラッセルの次の一言が当を得ているといえるかもしれない。「アフリカ人を侮蔑的態度で見下す因習は、日本人が黒人と接触しはじめた当初からの現象である。」¹²

日本人のきわめて単純な印象や理解とは裏腹に、最近の遺伝学的知見は、アフリカが、地球上の他のいかなる地域よりも多様性に富む大陸である可能性を強く示唆している。例えば、ケニア、エチオピアなど東アフリカ諸国出身の選手が、なぜ陸上競技長距離種目に強いかを社会科学、生理学、遺伝学などによる学際的な観点から分析した書『東アフリカ人の走行』は、「アフリカ人の間における遺伝的な変異が、アフリカ人とユーラシア人の間における遺伝的な変異よりも多い」とする遺伝学者の見解を紹介している。¹³ この立場に立つなら、アフリカ内のほうが、アフリカとヨーロッパ／アジア（ユーラシア）間よりも遺伝的な多様性に富んでいるということになり、黒い肌という見た目だけの表面的な共通性をま

とった身体の中身は、種々の相違に彩られていることになる。そうなる
と、「アフリカ人」は、「背の高さ、骨格、筋力やその他の形質から生理
学的な機能まで、大きく異なった特徴を有する幾多の人間集団によつて
構成される全体」を表象する概念として見直さなければならなくなる。
そこから生み出される精神力や知力もまた、安易な一般化を拒む、多様
性に富むものと考えるべきであろう。その一端を「アフリカ人作家の描
き出す豊饒なアフリカ世界」として感得した人物もいる。この研究者は、
この「豊饒な世界」に育まれた文学的創造力に心を打たれて、アフリカ
研究の道に入ったといふ。⁶⁵

日本人アフリカ研究者の言葉を要約するなら、アフリカ人は長年差別
の対象とされ、その存在は等閑に付されてきた観さえある。そのアフリ
カ人と好対照の位置にあるのが、今から数百年前に大西洋奴隷貿易に
よつて、アフリカから北アメリカ大陸やカリブ海諸島へと強制的に移送
された人々の子孫であるアフリカ系アメリカ人ではなからうか。これら
の人々は、ここでの詳しい紹介は割愛するが、周知の通りコメディアン、
アスリート、ヒップホップアーティストなどとしての活躍で知られ、日
米両国においていわゆる「報道の華」的な地位を築き上げてきた。

「黒人」という概念が「アフリカ人」と「アフリカ系アメリカ人」の
両者を包摂するものとして流通しているために、日本では両者の区別が
厳密になされず、発話者や対話者も両者の違いを曖昧にしたままで、日
常のコミュニケーションをこなしているように見受けられる。しかし、
それぞれのまったく異なる歴史的背景および今日的なメディアでの露出
度に鑑みても、両者が別個の人間集団として表象され、扱われるべき存
在であることは言を俟たない。日本人との接触や交流で生じる印象や表

象作用もまた大きく異なるはずである。本論が、エスニシティの異なる
複数の人間集団と日本人との接点で生じる経験の差異について結論的な
評価を下すことは不可能であるとはいえ、以下の作業を、このような差
異を踏まえて、日本人の経験を分析するための努力の端緒を開くものと
なることを期待したい。

黒い肌の下に遺伝的多様性を秘めた人々と日本人との接点に生ずる関
係性は、千変万化で起伏に富むものであったはずであり、また現在もそ
うであるはずである。上でみたように、アフリカ人内の遺伝的かつエス
ニックな多様性に加え、アフリカ人とアフリカ系アメリカ人との差異に
照らすなら、これはなおさらであるといえるだろう。相互の接触と交流
で生じる体験を掘り起こし、そこで過去に展開し、現在発生している関
係の実像を、因習やステレオタイプにとらわれない視点から照射する作
業が急務なのである。日本人と黒人との接点におけるリアルな体験を正
確に把握し理解するためには、こうした視点に立つことが不可欠である。

Ⅱ. 「黒人身体能力神話」が浸透する原因・過程の検証方法 と対人関係の密度を測る目安

「序にかえて」で述べたように、本論は、「別稿でおこなった概念規定
と方法論の説明を踏まえつつ、『序論的考察』を試みることを目的と
する。この目的を果たすために、少々長くなるが、まず黒人身体能力神
話が浸透する原因と過程を検証するための方法論を概略し、その上で序
論的考察に必要な対人関係の密度を測る目安を設定したい。

黒人身体能力神話に関する検証作業における主題とは、「『人種』概念
の科学的根拠が否定されて久しいにもかかわらず、日本人の間に今日な

お、黒人に固有の運動能力があるとする想定が蔓延しているのはなぜか、とりわけ、アメリカにおける世論や言論と比べた場合に際立つ、日本に特徴的な表象や言説のあり方は、なぜ、いかにして形成されてきたのか」というものであった。¹⁶⁾ もう少し簡単に言い換えるなら、日本に黒人身体能力神話が広く浸透しているのはなぜかということになる。この点を明らかにするために行った事例研究の方法論は次の通りである。

この研究の目的は、大学生をインフォーマントとし、彼ら・彼女らが、この世に生を受けてから現在まで、いかにして黒人身体能力神話に関する想定、表象、言説を獲得し、言説や表象を受容してきたのかを明らかにすることである。この問いかけを行うに至った前提として、こうした想定が蔓延や表象や言説の形成が一夕一朝に成されたわけではないこと、そして、それらが古い世代から新しい世代へと、時代を越えて継承されてきたことが確実であるという認識がある。以上の目的を達成するために、インフォーマントそれぞれの二〇年間あまりの人生において、神話と遭遇し、その影響を受ける上で重要であったと思われる段階や制度を特定し、それぞれについての経験の実際をアンケートと聞き取り調査によって掘り起こす作業をおこなった。これらの段階と制度に関して、試験的な聞き取り調査の結果を踏まえて次の四つの問題領域を設定した。

その第一は、「インフォーマントがこれまで／現在、黒人どのような関係にあった／あるのか」とそれに続く一連の問題提起である（「序にかえて」参照）。第二は、インフォーマントが「人種」および「黒人」という言葉・概念といつ、なぜ、いかに出会い（聞き）、これを習得して、使用するに至ったかである。第三は、第二の領域と深く関わるが、その制度的側面に重点をおいたものである。すなわち、インフォーマントが

「人種」および「黒人」という言葉・概念を、学校制度による教育カリキュラムを通じて、いつ、いかに学んだかである。そして第四は、インフォーマントが黒人身体能力神話を、いつ、なぜ、いかに受容あるいは拒絶するに至ったかである。この領域における経験としては、特にテレビ、雑誌、映画その他様々なメディアが極めて重要な役割を果たしている。以上の四つの領域における経験を掘り起こすために具体的かつ簡明な質問を用意し、まずアンケートによって回答を得た後、聞き取りによって、その回答の内容を確認し、さらに詳細なる回答を得ることができた。

インフォーマントの選定にあたっては、本研究の主眼が日本における神話の浸透度にあることから、日本の学生からより多くの協力を依頼した。しかしタイトルにあるように、文化的格差を考察する試みもかねていることから、相当数のアメリカ人大学生にも協力を依頼した。¹⁷⁾

次に方法論の具体的な手続について述べておきたい。インフォーマントとして協力を得たのは、日本の三大学（J1、J2、J3）に所属する三四名¹⁸⁾およびアメリカの一大学（A1）に所属する二一名の計五五名である。調査は、調査用紙を配布し、一定の期間の後に回収するアンケートと、回答者にアポをとり、一人当たり一時間前後の時間を使って行う聞き取りの二段階で実施した。アンケートは、本人に直接、あるいは友人・知人を介して趣旨説明書を配布し、同意を得たものに依頼した（回収率一〇〇％）。調査用紙は一七ページに及ぶもので、回答には平均一時間が費やされている。聞き取りはアンケート回答者五五名のうちの五一名に対して実施し（実施率九二・七％）、聞き取り内容は、同意を得た上でICレコーダーに録音した。

人選にあたっては、私が籍を置く大学とそれ以外で、異なる手続きを

とった。私が籍を置く大学では、講義や演習を通じて知り合った学生のうち、信頼できると判断した学生に逐次依頼し、同意を得たものを対象とした。他の大学では、各大学の教員に調査の趣旨を説明した後、信頼できる学生を紹介してもらうという手順によった。科学的なサンプリングの手法によったわけではないが、ジェンダー、人種・民族的アイデンティティ、出生地などの点でインフォーマントに偏りが生じないように極力配慮した。²⁰⁾

本論は上に述べた四つの領域のうちの第一、すなわち「インフォーマントがこれまで／現在、黒人とのような関係にあった／あるのか」とそれに続く一連の問題提起」を焦点とする。これらの問題提起に答えることによって、黒人身体能力神話が浸透する構造と過程を説明する必要性を訴えることがその目的である。そこで次に、本論の作業を進めるために必要な目安の設定について説明する。

インフォーマントたちは、大学キャンパスで講義や演習に出席し、サークル活動に集い、バイトに精を出し、自宅通学のもは家族と生計を共にし、一人暮らしのものはアパートやワンルーム・マンションで寝起きする、その意味で標準的な大学生である。彼ら・彼女らの日常生活は、自宅や、趣味やライフスタイルを共有する親しい仲間たちからなる私的空間と、その外側に位置づけられる、通学時、移動時に利用する駅や交通機関、目的に応じて訪れる郵便局、銀行、レストランや定食屋、カフェ、飲み屋、映画館、美術館、博物館などからなる公共空間において繰り返される。その点でも概ね似たり寄ったりであるといえる。しかし、インフォーマントと黒人との関係は、言葉を交わしたことさえない者から、相当内容の濃い会話をしたり、一緒にスポーツに興じたりしたもので

まぢまぢである。その意味では、一人ひとりが具体的に特殊な経験の持ち主であるといえよう。

一連の問題提起のうち、「黒人とのような関係にあったか」、「どのような体験をしてきたか」、その時「どのような印象、感情、意見を抱いたのか」については、インフォーマントの語りが自ずと明らかにしてくれるだろう。しかし、「接触・交流の様態・度合と印象・感情・意見との間の関連」を分析するには、接触と交流をその粗密・深淺によって序列化するための目安が必要である。そのため、社会心理学の理論を援用することによって、これに対応したい。²¹⁾

社会心理学者レヴィンジャーとスノークは、社会で生計を営む個々の人々が、何かのきっかけで出会い、知遇を得て親睦を深め、相互の信頼を強め、友情や愛情の絆で結びつき、婚姻などの制度によって社会的に認知を求めようになるまでの過程に注目し、次のように段階を設定した。それは、レベル〇、一、二、三からなる四つであるという。レベル〇はまだ接触のない「無接触」段階、レベル一は相手を目にするが、相互作用の生じていない「一方的覚知」段階、レベル二は接触の成立から形式的な情報交換が行われるまでの「表面的接触」段階、そしてレベル三は、親密な関係が築かれる「相互性」段階である。この枠組を参照しつつ、インフォーマントの語りによって再現された接触ないし交流の実態に適合するよう修正を施し、関係の弱いものから強いもの、あるいは薄いものから濃いものの順で次のように設定し直すものとした。

まず接点が存在しないレベル〇について検討した。対人関係の発展を包括的に捉えようとする社会心理学者にとって、そのプロセスに原点として「無接触」の段階を設定することは、たしかに意味をなすであろう。

しかし、実際の接点において生じる体験、印象、表象を対象とする本調査にとって、それが意味をなさないのは明らかである。したがって、レベル〇は除外するものとした。これに対しレベル一は、日本人と黒人の関係性の始まりとしてまさに重要な段階である。そこで、アンケートにおいてアフリカ系の人を「見かけたことがある」という選択肢を設けることで、その経験の有無を問うものとした。一方レベル二は、「表面的接触」と見なせる現象にもいくつかのパターンが認められたため、これを三つに細分化した。それらは、「アフリカ系の人と」会ったことがある、「話をしたことがある」²⁰⁾、あるいは「知人にアフリカ系の人がいる」である。それぞれをアンケートに選択肢として設定した。レベル三については、同じ「相互性」の段階であっても、「友人にアフリカ系の人がいる」のと「親戚や家族にアフリカ系の人がいる」のとは、かなり重みが違うと思われる。したがって、これら二つに分割して、それぞれを選択肢に加えるものとした。結果的に、レヴィンジャー／スノークによる四つのレベルを、「見かける」から「親戚や家族になる」までの六つの段階へと修正し、これに「その他」を加えて七つの選択肢を設定した²¹⁾。

アンケート調査ではインフォームドそれぞれに、これら七つの選択肢から当てはまるものすべてを選んでもらうことによつて、それぞれの段階での経験の有無を確かめ、経験がある場合はその内容を詳しく記述してもらおうよう依頼した。聞き取りでは、不明な点、不確実な点などの補足・訂正を兼ねつつ、その内容をさらに詳しく尋ねた。次節以下において、その結果を検討したい²²⁾。

Ⅲ. レベル一：「一方的覚知」Ⅱ「見かける」経験の広さと浅さ

レヴィンジャー／スノークのモデルによるレベル一にあたる「見かける」経験とは、「一時的覚知」、すなわち対人関係や相互作用が存在していない状態において、ある人が他者を認知する状況を指している。このような状況は、当然ながらその性質上、公共の場において発生するものである。インフォームドの証言によれば、その舞台は、池袋、原宿、渋谷、六本木など東京の主要な繁華街に加えて、交通機関の中、大学構内、バイト先、国内・海外旅行の途上、そして「街角」「道端」「近所」などの言葉で表現される不特定な場所などであるとされる。

「見かける」経験の最たる特徴は、インフォームド三四名全員がそれを有しているということである。アフリカ研究者が共通してアフリカを、そしてアフリカ人を遠い存在であると示唆していることは上で述べたとおりであるが、少なくとも今日の大学生にとって黒人との接触は、日常的な経験に含まれる現象であるといえよう。この点は強調しておきたい。

「見かける」経験が、局地的な現象ではないことにも留意したい。もちろん国内外からの人口が激しく流入する首都東京において頻繁であることはいずれでもない。ヤスコやハルコは池袋のサンシャイン通りで「行くといつもって感じで」黒人に会おうという。ミホはそれを、「キャッチではないのかもしれないけど、そういう風に働いている人」と呼んでいる。アユミは週三、四回働く新橋のバイト先で見かけ、モトシは原宿や渋谷に「行ったらみえますね」と語る。曰く、「勧誘とかです、見てつてよ」みたいなのがありますね。」もっとも、アイサのように「この人

たちはいったいなにやっつてんだって思った。お店の勧誘なのかぜんぜんわかんなかった」という感想を抱く場合もある。

しかしこうした接点は、東京に限られたものではない。ススムが見かけたのは、広島市本通商店街で、「露店見たいのを開いていて、なんかネックレスとかそういうのを売っている」人たちだった。アイは大阪心斎橋アメリカ村やJR大阪駅で、「ふつうに歩いてはる」または「ただ立っただけ」の黒人を見たという。北陸から横浜に親と観光にきて、黒人を見かけたチユキのように、地方から首都圏にやってくる場合もあれば、その逆もある。東京に下宿するフミは、静岡でブラジル出身の黒人に出会ったという。

以上のような事例に鑑みるなら、旅行やバイト、あるいはサークルの活動など可動性の高い大学生人口であれば、大都市や地方都市の商業地区で、黒人に出会う機会は非常に多いといえるだろう。また、大学に通う若年層ほどではないにせよ、日本人一般が黒人を「見かける」経験も、無視できない程度にまで増加しているといえるだろう。それは、海外旅行という非日常的な時間と場所に限られたものではなく、生活体験としてごく日常的なものになりつつあるようである。

では、「見かける」経験に伴う感情や心境はいかなるものだろうか。こうした状況で黒人を見かけたインフォーマントの声に耳を傾けてみたい。結論を先取りするなら、黒人との遭遇についての彼ら・彼女らの語りには、興味深い共通性がある。それは、その表現や描写に、ある種の「冷たさ」あるいは「冷淡さ」とでも呼べるような距離感が感じられることである。その意味では、やはりアフリカとアフリカ人は「遠い」存在なのかと納得したくもなる。この距離感を伴う一人ひとりの証言は、

すくなくともレヴィンジャー／スノークによるレベル一の段階では、肯定的ではなく否定的な、積極的ではなく消極的な、つまりポジティブではなくネガティブな印象や心持が、二つの人間集団の接点に付きまとうのではないかという結論を導かせるのに十分である。

ここでいう距離感は、例えば、「人を人ではないかの如く扱う、あるいは人をものであるかの如く扱う態度」と言い換えることが可能である。母親との横浜への旅行中に黒人を見かけたチユキを引き合いに出してみよう。彼女はこの時、「さすが都会だね」と母に語ったというが、その印象を次のように語っている。

富山市とかでは黒人の人ってあまり歩いておられないんですけど、横浜に旅行に行った時に、歩いていて、親といっしょに『ああ、さすが都会だね』っていつて話してて……『黒人は』一人でした……『ああ、いるねえ』みたいな感じです。

本通商店街で露天商を見かけたススムはこう語る。

広島市の本通で物を売っていました。露店見たいのを開いていて、なんかネックレスとかそういうのを売っていました。何回もですね。通ればほとんど毎回いますから。本通っていうのは、端から端まで五〇〇メートルくらいあって、そこでほしい五、六店くらい、五、六人くらい、そこでいつも同じ人が売っていました。無許可かどうかわからないけど、出してると感じてです。

音楽やラップに詳しいコウイチは、京都四条通りや大阪のクラブで黒人を見かけたときの印象を、次のように表現する。

アメ「リカ」村とか、京都四条通りで多くみかけますね。服の商売してます。B系が多いです。それ以外で……アーティストとか除いて、街で接する黒人は無いに等しいですね、無いですね……イメージはよくないですね……いやなんか……僕ヒップホップ好きやけど、ああいうのあんまり好きじゃないっていうか……だらしなない感じがします。……B系の服を置いてるとこは、黒人の男の人が立ってます……あとクラブで会ったことがあります。月に二、三回くらいです。けっこう一人はいますね。みるだけです……いるから行くってわけじゃなくて、行ったらいるって感じですよ。

上記三者が語る、「ああ、いるねえ」みたいな感じ、「出してるって感じ」、「行ったらいるって感じ」という表現に込められた心情は、おそらく対象が日本人であるのなら、成立しないものではないだろうか。異なる人種ゆえの距離感といえるかどうかは、世界の他の民族や国民を対象とする調査結果との比較をしなくてはわからないが、少なくともここで、対象としている人間を物象であるかのようにみる視線を、共通点として指摘しておくことは可能であろう。

同時に、インフォーマントの黒人との遭遇についての語り口に、相手を没個性化させる傾向を認めることもできる。一人ひとりの差異や人格を尊重せず、全体のなかに個性を埋没させてしまう認識の傾向とでも言い換えられるだろうか。同じ場に居合わせる複数の人間を一集団として、

十把一絡げに扱う姿勢は、池袋のサンシャイン通りで黒人と出会うヤスコの次の言葉に、顕著に表れている。

サンシャインの通りに、いつもいるんですよ……なんか……行くといつもって感じて……遊びに行くときですね……立ってるだけで……数人でわあって……話しかけられたことはないです。

「見かける」側と「見かけられる」側の距離感とは、「見かける」インフォーマントたちが抱く、ある種の恐怖のような感情ゆえであるともいえる。都内の繁華街で黒人に呼び止められそうになったアイサは、その時の気持ちをこう語る。

原宿にいたとき声をかけられました。一回だけです。ああ、もう、普通に「あの、どこいくの」みたいな……「あの、むこうです」って行って、そのままです。この人たちはいったい何やってんだって思いました。お店の勧誘なのか、ぜんぜんわかんなかったです。でもやっぱりなんかこわいって思いました。

ナツキは、池袋や原宿での経験を次のように語る。

たとえば池袋だったり、原宿だったり、そういうところでジャージを売ってる、あとは道にすわって、何をしてるんだろう、何を考えてるんだろうっていうような人を見かけますね。ジャージのイメージが強いですね。池袋だと、ピーダッシュバルコの前に必ず二

人います。男の人です。その人たちは何をやってるのかわかりません。ちょっとこわいんで、話したことはありません。

これらインフォーマントの証言は、当然ながら、かつて多くの外国人や一部の政治家が好んで用いようとした「文化的に同質的かつ均質的な日本」というステレオタイプが、今日、なおさらの外れであることを裏付けている。インフォーマントと黒人との接触が、「古き良き」時代のステレオタイプと全く無縁で、なおかつ現在多くの日本人が思っているよりもおそらくはるかに高い度合いで生じていることは間違いない。日本の経済力に引き寄せられ、アフリカを含む世界各地から入国した人々は、全国に散らばり、日本人に、少なくとも「見かける」機会を提供しているわけである。

同時に、黒人との接触は、当事者それぞれの事情と状況によって特殊な経験でありながら、なお際立って類似した印象や心境をインフォーマントに抱かせてきたことも明らかである。この類似性ゆえ、こうした接触は、個別で断片的なでき事として、時の経過とともに記憶の片隅に追いやられるだけではなく、日本人の間観あるいは人種観とでもいうべきものに、少なからぬ影響を及ぼす可能性を有しているとはいえないだろうか。それは、黒人ステレオタイプとしてしばしば取りざたされてきた「スポーツがうまい」などとは異質で、もつとずっと否定的なステレオタイプ出現の可能性と言い換えてもよいかもしれない。上の証言からわかるように、現在の日本の若者と黒人との接触が、非常に多くの場合、好感情をもたらしえないことは明らかである。というよりも、事態はもつと悪く、恐怖心を伴う距離感をさえもたらしめているのである。

日本人と黒人との交流の全体像は、最近の報道記事などを踏まえて、体系的な努力のもとに描かれなければならないことはいうまでもない。²⁵⁾ それでも、ここでとりあげたインフォーマントたちの証言から、これだけはいえるのではないか。非常に高い比率の接触が、「物を売る黒人」と通行人としての日本人との間に発生している以上、そしてそれが歓迎されざる者と歓迎しない者との出会いである以上、外見や容貌の差異がもたらす単なる違和感では説明のつかない、強いネガティブな感情を伴う黒人ステレオタイプが、今まさに形成されつつあり、その危険性を、わたしたちは十分に自覚しなければならない。

IV. レベル二…「表面的接触」II「会う」、「話す」経験と交錯する好悪感情

レヴィンジャー／スノークのモデルによるレベル二を細分化したうちの二つ、「会う」および「話す」経験をここでは焦点とする。インフォーマントの中には、日本と発展途上国との経済的格差が構造的に生み出していると思われる「冷ややかな距離感」とでも称すべき配置を乗り越えて、もつと直接的で実質的な交流を体験したのも少なくない。黒人と「会ったことがある」と答えた一四名、「話したことがある」と答えた一三名がこれに当たる。特に「話したことがある」と回答した者による語りは、両者の相互作用を、これまでみてきたものよりずっと変化に富んだ、双方向的なものとして描写している。そこに再現されるやりとりは、必ずしも友好的な性質のものばかりとは限らないが、いずれにせよ、異なる人種間の関係を生き生きと伝える点で共通している。

「会う」、「話す」経験において生じる関係や感情のやりとりは、旅行先、

バイト先、教育の現場、そしてより非公式でどちらかという私的な対話の場という四者に大別することができる。まず旅先での経験から振り返ってみよう。

中高一貫校に通ったソウタロウは、旅行先での出会いをこう述べている。

おれはそのお、中学と高校のプログラムみたいなやつで、個人的に行きたい人を募って行く留学みたいのがあって、中三と高一と高二で、それぞれ二週間ぐらいなんですけど、オーストラリアのゴスフォードに行って、黒人の人を見たくらいです。一年目に会って仲良くなって、「来年も来るね」っていって、それで三回行きました。

学校の選択プログラムに参加したソウタロウは、そこで出会いを経験し、再会を約束し、実際に再会した。その経験を繰り返したと言っている。淡々とした口調から、その内容を深く追跡することは難しかったが、ここで生まれた交流が親睦的であったことはまちがいない。

ナツキの海外旅行での出会いは、これと対照的なものだったようである。ナツキがサンフランシスコを観光で訪れた際に立ち寄った、公園での出来事である。

アメリカに行つて、公園でアフリカ系の人と話してきました。はい、そのお、友達と行ったときに、ちょっと派手な服装をして、公園に座ってたんですよ。そしたら、ちょっとあぶなそうな黒人のおじいさんみたいな人に、「キャン・ユー・スモーク？」(“Can you

smoke?”)みたいにいわれて、「ノー、ノー、ノー」って言って(笑)。そうですね、浮浪者っぽい人で、それで、えっ、この人何がしたいんだろうって思つて、もしかしたら、危なかったりするかもつて、麻薬とか、どうなんだろうって思つて、けっこう汚らしそうな感じで、ひげとか生えてて、そんな感じだったです。

この時の黒人遭遇者は、単にタバコをねだっていたのか、あるいは麻薬を売りつけようとしたのか。真相はわからないが、いずれにせよナツキにとつてはとてもスリリングな体験だったようで、その時の緊張と興奮は回想しながら語る表情からも窺うことができた。

インフォーマントにとつて、バイト先も黒人との出会いの舞台である。「アルバイトでお店にアフリカ系のお客様がきた」というサトコの場合、とりわけ強い感情を伴う経験ではなかったようである。それに比べ歯医者者の受付として働いていたミチコは、患者の一人としての黒人と、もう少し強く記憶に残る対話をしたようである。彼女はこう語る。

歯医者者の受付でアルバイトをしていた時、患者さんとして来院されました。わたし、日本語しゃべれないと思つたんで、英語使っちゃったら、向こうが日本語で返ってきて、恥ずかしかったです……「いくらです」とか、そういう感じのやりとりでした。何回も来ている患者さんでした。出身地はわかりません。

ミチコは外国人をみると英語をしゃべるといふ、あるいは外国人は日本語が話せないという思い込みに囚われていた自分を恥じたようで、ど

ちらかたというと自責の念に駆られたようだった。これに対し次のエリナの口調は、相手に向けてのもっと否定的な、憤りとってもいいような響きを含むものである。

「あたしケンタッキー「フライドチキン」でバイトしてて、お客さんで黒人の人がけっこうくるんですよ。そこでお金くれたり……。料金じゃなくて、なんかやさしいっていうか、へんにやさしかったりして、「これで食べなさい」みたいのがありました。日本語で会話しました。「くれようとした金額は」五〇〇円くらいです。返してもダメで、募金箱に入れました。「こんなことが」よくありました。同じ人もですけど、三人くらいです。英語でもちよつと話しました。アメリカ人だったと思います。

ここでの黒人たちは、日本人の女子学生バイトに、いわゆる「ナンパ」的に付き纏ったのかもしれないが、明らかに不首尾に終わったようである。エリナは、顧客たちの印象をこうまとめた。「ガタイがよくて、でかくて、すごいなれなれしくて、けっこうやな感じのイメージでした。」以上の、旅先やバイト先でのいわば偶発的な出会いと比べると、次の教育現場の情景はかなり赴きが異なっている。その理由は、いうまでもなく、街頭での売り手と通行人の接触や、観光地や店舗での他人同士の行きずりの関係と異なり、教室が出会いのための準備や心構えと、その機会を一定の時間以上継続させるための合意と場所を提供してくれるからである。

スマレは、中一の時に黒人の A L T (Assistant Language Teacher :

外国語指導助手) の先生に英語を教わった。その思い出をこう語る。

A L T の先生が黒人でした。中一の時でした。「あの先生黒人だ」って言ったと思います。男性で、二〇代後半だったと思います。アメリカ人でした。「マイク」という名前です。一週間か二週間に一度くらい、不定期に教えてくれました。おどけた感じの、面白い先生で、クラスのうけはとってもよかったです。

スマレの語りからは、その先生が面白く、クラスで人気があったこと以上に具体的な情報を得ることはできなかったが、ヨシコの話は、もっと写実的で、彼女自身の印象の変化を伝えてくれる点でとても興味深いといえるだろう。ヨシコは、高校時代に英会話学校で、黒人の先生に学んだ時の経験を次のように語る。

高校二年の時です。あの、ほんと一年間だけだったので、上達したなんていえないんですけど。ガイジンさんとお話できた、免疫がついたって感じですよ。夏休みなんか、毎日のように通い詰めて、行っていました。そうですね、黒人の先生とそうでない先生は半々くらいでしたかね。そうですね、ああやっぱしあの、なんですか、黒人の先生は表情が硬かったの、なんかへんにビクビクしちゃって、こわいなってイメージあったんですけど、「マトリックス」のモーフイアスにすごく似てて、それが、失礼ですけど、もつと黒いっていうか、黒人さんで、髪がくるつとして、似てて、「モーフイアスだ」、「モーフイアスだ」って思ってたなら、意外に興味の部分では、バスケットか、

当たり前に考えちゃったんですけど、ストリートでやっているイメージがボンで浮かんで、彼もバスケをするって行って、アメリカ人だって行ってました。字もなんか、見た目に似合わずかわいい字を書いて、なんかそんな思い出しかないんですけど。この先生に教わったのは多いですね。こっちから指名できるかはわからないですね、忘れちゃいました。ただ、よく当たって、教え方もすごくうまくて、ただ、ニコニコしてくれないんですよ。まあ、笑ってはいけるんですけどね。話す話題としてはスポーツか映画だったんですね。「モーフイアス」先生は、特にスポーツが話題にでたんですね。もう一人のあの、黒人さんで、ちょっとウーピー・ゴールドバーグみたいにおくつとした人は、映画が好きで、よく映画の話をしてました。

当初ヨシコは「表情が硬い」とか、「かわいい」という印象をもったが、やがてこの先生に学ぶうちに、いくつか発見をする。まず映画の登場人物「モーフイアス」との類似である。この映画ファンの彼女にとって、これは親近感を抱くのに十分な特徴であった。さらにスポーツや映画など趣味が合うことがわかり、英語のレッスンで会話が弾んだようである。その上、「見た目に似合わず」、「かわいい字」を書くことがわかり、ヨシコはさらに打ち解けることができた。そして「教え方もすごくうまい」ことが、好印象を強く後押ししたのである。ヨシコと「モーフイアス」先生とは、両者が互いの相性と共通点を見つめるにつれて、(少なくとも彼女にとっては)楽しい語らいのひとときをもつようになった。英会話の指導というビジネス契約の枠組の中での関係であったとはいえ、一

人の日本人女性の、異なる人種の男性に対する印象の変化を伝えるエピソードとして受けとめたい。

以上記述した触れ合いは、旅先や、バイト先や教育の現場のような公的な空間で発生したもののだが、インフォーマントの中には、もっと私的な交歓の場における体験を語ったものもある。ヨシヒコもその一人である。彼は先輩に連れられて飲み会に出かけ、先輩の友人の一人だった黒人と話をした。曰く、「うちのコースの先輩がよくガイジンの人と仲良くしてて、たまたま飲み会の時に一緒になって、そのときに話したって感じですよ。」そこで出たのは、スポーツなどの軽い話題だった。「たまたまです。『ちょっとこっちこいよ』っていわれました。去年の冬くらいです。名前は覚えていないです。英語で、スポーツとか軽い話題について五、六分くらいです。」この描写からは、それほど強い感情の動きは感じ取れない。

しかし、ヒップホップに夢中で、仲間と渋谷でしばしばラップを踊るユウイチの話は、「感動」ともいえるようなニュアンスを伴う点で、ヨシヒコの語りとは対照的である。ある日ユウイチが、渋谷で踊っていると、飛び入りで黒人が加わり、一緒になって踊ったという。以下はその時の様子である。

ヒップホップって、なんか塾とかと違って、自分から見ても盗む、ストリートっていうのがやっぱあれだから、それに基づいてやってるんですけど。……黒人も多いし白人もいますね。三、四人は来るとおもいます。昼間の三時からってなってるんですけど、最後までいるときもあります。一〇時くらいっすかね。とちゅうでご飯とか

食べに行っても、みんないるから戻る。スキルをみがく場所、見せ合う場所です。それがあると知らない人でも、やっている人は混ざってきて、急な出合いがいいですね。黒人の人が入ってたら、「ラップしてくださいよ」っていったり、あとで落ち着いたとき名前とかきいたり、英語でしゃべりかけます。「ワッツユアネーム」って、片言の英語で。

ユウイチを驚かせ、虜にしたのは黒人たちの声だという。

違いますね。やっぱり言葉が英語だからわかんないのは、もうしょうがないんですけど、それを超えるなんか、バイパスっていうか、なんか伝わるんですね。まず声の質もちがうんですね、日本人とは。低い低音がでるっていうか、なんか、聞こえやすいって感じですね。やっぱりジェスチャーもはげしい感じしますね……かっこいいです。

ユウイチは思いつく限りの賛辞を並べて、黒人ラッパーたちの才能とパフォーマンスを称えている。ここに見られる熱中ぶりに、日本人の若者が黒人と黒人文化とされるものに入れ込む場合の、一つの典型的なパターンを見ることができるとはれない。

以上見てきたように、「会う」、「話す」経験は、全体としては節のタイトルに掲げた如く「好悪感情の交錯する」場という観を呈しているといえる。しかし今一度、スマイレ、ヨシコ、ユウイチの語りとその内容を想起すべきであろう。レヴィンジャー／スノークによるモデルのレベル

一でみられた関係のあり方とはまったく異なる展開がそこにはある。これは、街頭やその他の公共空間での偶発的な関係と違って、安定的で自らの選択が伴う文脈を与えられれば、ステレオタイプに惑わされやすい集団間にも、信頼の絆が形成される可能性があることを如実に物語っている。特にヨシコの事例は、ステレオタイプが実質的な体験によって解体されるプロセスを体現したものであるとして、注目に値するといえよう。

「会う」、「話す」経験の場での人間模様の中には、「見かける」経験に共通する距離感や冷淡さとはおよそ無縁の世界が広がるものもある。その意義については、次節の検討も踏まえて、最後にまとめて考察するものとしたい。

V. レベル二「表面的接触」II「知人にアフリカ系の人がいる」

二ことの意味と可能性

レヴィンジャー／スノークによるレベル二のうちの三つ目にあたる「知人」としての交流の段階に到達したものは、三四名のインフォーマント中二名である。いや、二名しかないなかったというべきであろう。この数についての評価は、最終節での検討に譲るものとし、ここではその二名の語りに耳を傾けたい。二人の印象はいずれも好意的なものである。その一人エイコは、「知人」として、次の二人を挙げている。一人はエイコが通った英会話学校の教師で、もう一人は高校時代のALTである。それぞれの人物についてエイコの言葉を引用しよう。

今通っている英会話学校に一人います。三人の先生がいて、そのうちの一人がアフリカ系で、ニューヨークから来た女性です。たぶ

ん二七、八才だと思えます。明るくて、結構話ができます。授業にテキストがあるんですよ、その中で、おもに会話をやります。……授業の間が一〇分あるんですけど、その間も普通に話しかけてくれて、授業は五〇分です。たまに一人のときもあります。そんな時は「ラッキー」って思います。

もう一人は高校のALTです。高校一年のときにいました。その人はどっかに異動になりました。アメリカ人です。すごく英語が聞きやすく、しかもおもしろくて、男性です。三〇歳いくかいかないかだと思えます。とりあえず、すごい明るくて、みんなを笑わせてくれて……友達が何かわからないっていつても、絵でとか説明してくれました。おもしろい先生でした。

もう一人のハツミは、大学で同じゼミをとるフランス出身で二一歳の男性について語った。

留学生です。話はけっこうするんですけど、私か勝手に「友人」って書いていいかなあって、思いました。フランス系の留学生です。去年来ました。いま、フランス史の授業で一緒です。去年も語学の授業に来ていて、あとゼミも来ていて、そこで結構みんな仲良しになりました。授業は日本語でやってます。日本語もけっこうしゃべれる人です。あたしにはあんまり勉強にならなかつたけど……(笑)。男性です、二二才か、それくらいです。

これらの証言から浮かびあがる情景や人間像は、スミレやヨシコの「話をしたことがある」「経験とそう違わない。おそらくそれは、このアンケート調査の質問項目では、アフリカ系の人と「話をしたことがある」と、「知人にアフリカ系の人がいる」を区別したが、回答者にとってあまりこの区別は意味を成さないことを示唆しているのかもしれない。あるいは、日本人の大学生の中には、外国人と「話す」と「知人になる」とことを、同じくらいの重さの意味で受け取るものがあるということなのかもしれない。いずれにせよ、この辺りの主観による差異はさておき、「話をしたことがある」あるいは「知人にアフリカ系の人がいる」とする経験では、相互に心が通い合うコミュニケーションが成立し、それが継続する可能性が相当あるということ、改めて確認しておきたい。

アンケートと聞き取りでは、レヴィンジャー／スノークによるレベル三に当たる「友人にアフリカ系の人がいる」、「家族や親戚にアフリカ系の人がいる」という項目を選択したものは、三四名中一人もいなかった。²⁶⁾

むすびにかえて―「神話なき世界」の実相を求めて

以上のインフォーマントによる証言によって、日本における日本人と黒人の関係を一般化する意図がないことはすでに述べたとおりである(注二十)。しかしそのような関係を考察するための材料として、インフォーマントと黒人との間にみられた接触と交流の経験を、次のように要約することができるだろう。

彼ら・彼女らは、もつとも浅い段階(レベル一:「一方的覚知」)の接触においては、一般に、あるいは一律にといってもいいほど共通して、

黒人に対して距離を置き、「冷淡」といつてもよいほど不親切あるいは無関心な視線を向けていることが明らかとなった。しかし同時に、この距離や冷たさは、路上でキャッチセールスを行う人に対する通行人の警戒や反感を考えるなら、当然ともいえるものである。そのような活動を促す要因として、多くの外国人労働者を流入させ、その場に配置させる日本の経済体制と社会秩序こそ、批判されるべきものである。

こうした観点からの批判は別の機会に譲るものとし、ここでは、よりレベルの高い交流（レベル二…「表面的接触」）において、インフォーマントが様々なかたちでみせた、黒人に対する親睦の情の表現や好意的な態度に注目したい。そのほとんどは、「黒人Ⅱスポーツマン」という定式、つまり黒人身体能力神話を裏付ける経験とは無縁のものである。上にみた日本人大学生とアフリカ人やアフリカ系アメリカ人の対話や交渉の多くが、この神話とは違う世界で展開していることを強調し過ぎることは不可能である。ただし、絶対数と比率のいずれでみても、高いレベルの交流はごく限られており、ステレオタイプを破るためのインパクトを期待することは事実上困難であることにも留意しなければならない。「知人にアフリカ系の人がいる」と答えたものが二名、レベル三…「相互性」段階の体験者が皆無であるという調査結果は、如実にそれを物語っている。

以上を踏まえて、やや重複が生じることを承知しつつ、「序にかえて」で問うた諸点に立ち返り、調査結果に基づいてそれに答えてみよう。まず、インフォーマントは、実際にはどのようなリアルな体験をし、その体験にはどのような段階や可能性があるのか。

本論では、レヴィンジャーとスノークによる社会心理学的な枠組を援

用し、対人関係の密度を測る目安を設定した。それに基づき、日本の広範な地域で、もつとも低いレベルにおける接触が日常的に繰り返され、そこではステレオタイプ的な印象が発生し、蓄積されている現実を明らかにした。この点を憂慮しつつ、他方で、より高いレベルの交流においてもつと内実を伴う経験を重ねるインフォーマントにもクローズアップした。

次に、そのような体験を通じて、インフォーマントたちは、どのような印象、感情、意見を抱いたのか。

低いレベルの接触では、外観的な身体上の差異に圧倒され、距離をとろうとしたり、恐怖を覚えたり、また相手を集団の一部として見なしたりする傾向が見られた。その意味では、黒人を「見かける」経験は、そのほとんどが人間の交流とは無縁の、人としての相手の存在を無視しかねないような視線を伴うものであった。しかしより高いレベルの交流では、内実のある経験が増えるとともに、感情の交流が生まれ、人々とのコミュニケーションが成立していた。「会う」または「話す」経験は、旅行先をはじめ、バイト先や英語教育の現場などの公的な空間と、飲み会やラップのステップを踏む趣味的活動などの非公式な空間のいずれでも起きていた。こうした場や状況において、インフォーマントは黒人に対し肯定的、否定的いずれの感情をも抱いていることから、二つの人種の接触・交流のレベルが高まるにつれて、当事者が抱く印象や感覚がどうなるかについて、単純な一般化を避けるべきであることがわかる。

しかし「知人」としての経験を併せて考えるなら、相対的に高いレベルでの交流において、相手に対する好感度の高いインフォーマントが目立ったこともまた事実である。ここでは、生徒と教師の関係、腕前に違

いのあるラッパー仲間間の関係、外国語として学ぶものとその言語を母国語とする留学生との関係などが結ばれていた。これらは、当事者の間に技能・経験的な格差が介在しているために、厳密に言えば、対等な個人間の親交や友情とはいえないかもしれない。しかし、それにもかかわらず、あるいはだからこそ、教え、教えられる間柄に伴う尊敬、憧れ、感謝などの心情を基盤にして、ポジティブな印象や表象が作られる機会が少なくないことも確かである。また、「見かける」段階から「知人になる」段階までの体験を通観するならば、そこに一つのパターンを見いだすことも可能である。それは、初対面時に英会話講師の表情が「硬く」、「怖い」と感じながら、やがて「モーフィアスに似ている」、「かわいいう字を書く」、「すごくうまい」教え方などの性質を知って、好感を抱くに至ったヨシコの経験に顕著に表れている。

では、接触・交流の様態・度合と、印象・感情・意見との間に関連はあるのか、あるとしたらそれはどのようなものか。

厳密な意味では相関とはいえないにせよ、一定の関連を想定することは不可能ではない。黒人を「見かける」段階にとどまったインフォーマントは、黒人を「もの」であるかに見えず視線を向け、恐怖を抱き、個性を無視するかの発言を残している。しかし「会う」、「話す」、「知人になる」段階に達したインフォーマントは、ヒップホップの技能に憧れたり、授業で学んだりして親近感や好感を高めるに至っている。なかには再会を約束したのものもある。「見かける」関係が、「見かける」側から「見かけられる」側への一方的なものであるのに対し、「会う」、「話す」、「知人になる」関係は、両方向的である。前者から後者へ移行するなら、両者の位置は間接から直接へ、遠隔から近接へと変化する。後者の段階に

達した数名が、陽気で、友好的で、話の弾む関係を結ぶに至っている点に、特に注意を促したい。^②

ここで、第一節で述べたアフリカ人の無名性とアフリカ系アメリカ人の著名性という対照にも、今一度注意を喚起したい。本論では証拠を十分に検討できなかったが、レベル一 of 接触の対象が主としてアフリカ人であり、レベル二 of 交流の相手が主としてアフリカ系アメリカ人である傾向を確認することはできた。このことは、日本における黒人表象を考察する際の一つの前提として、更なる検証に付すべき価値を有するといえるだろう。

最後に、かくリアルな体験によって獲得した印象・感情・意見はステレオタイプを裏付けるのか。

インフォーマントの中で、実際に黒人とスポーツをした経験のあるものは少なく、「スポーツがうまい」、「身体能力がある」、「運動能力に優れている」という印象を現実の体験から受けたものはほとんどいない。むしろ相対的に密度の高い関係で際立っていたのは、英語の指導という知的な交流を通じてのものである。リアルな体験は、総じて「黒人はスポーツがうまい」というステレオタイプを裏付けていないといえるだろう。

ただし、このようなリアルな体験を味わう者の絶対数および比率が少ないこと自体に、大きな問題があることを忘れてはならない。「知人になる」経験をもったものはごく少数で、「友人になる」や「親戚や家族になる」レベルに達したものは皆無であった。インフォーマントの接触と交流は、概ね公的な空間に限定されており、その多くは不規則かつ偶発的なものである。大多数のインフォーマントは黒人を他者として傍観

する立場に安住しているかのようであり、対話はまれにしか生まれず、ステレオタイプのな言説や表現を検証する契機を与えられることは滅多にない。

社会心理学者ルパート・ブラウンは、ステレオタイプを変容させる要因として、「あるステレオタイプに対する著しい反例となる人物に数人出会う可能性」を挙げている⁽²⁾。日本におけるアフリカ系の人々に話を戻すなら、この人間集団が日本人と深い交流を持つ機会がかくも制約されている現状にあつて、ブラウンのいう可能性が実現する機会は、ごく限られているといわざるを得ない。しかし、次にみるコウイチのように、その可能性がまったくないわけではない。

コウイチは、小学校五年の時に、一ヶ月ほどのパラオ方面への船旅を経験した。その時のことは、今でも「けつこう記憶に残って」いるという。

そうですね、そのときに相手にいたのが黒人でした。その他のガ
イジンもたくさんいました。ほとんど大人です。相手も結構本気で
した……(笑)。ちゃんと試合をしました。バスケもしました。チー
ム対チームでやりました。大人にまじってぼくだけ子供でした。サッ
カーとかやるとみんな集まってきました。日本を出帆した船です。
お客さんの中にいろんな人がいました。毎日なんかそういうのが開
催されて、行って、走って、つて感じです。結構やりました。週二、三
回はやりました。五人くらいいたら、黒人は一人か二人くらいでし
た。でもなんか、テレビでみたりするほど、そんなにスゲエってい
うんではなかったです。

一人の小学生が、「テレビでみたりするほど、そんなにスゲエってい
うんではなかった」という感想を抱く経験をしていたという事実をあえ
て重くみるべきであろう。これはおそらく、コウイチにとってステレオ
タイプを打破する、一つの契機ではなかったかと思われる。しかしこの
ような経験をできる日本人がどれだけいるだろうか。家族で日本を出航
して、一ヶ月間ほどのパラオへの船旅につく小学生。日本全国を探して
も、それはほんの一握りにすぎないだろう。しかし、その数が少ないと
はいえ、リアルな経験に照らすと神話の根拠の脆弱さはたちまち明らか
となる。

三四名のインフォーマントによる語りには、「黒人身体能力神話」がや
はり神話に過ぎないことを再確認させてくれる。ならば改めて問わねば
ならない。この神話はなぜ、いかに浸透してきたのかと。そして日本の
大学生たちは、これまでの人生のいずれの段階で、いかに、どのような
メディアを通じてこれを受容するに至ったのかと。「神話なき世界」の
実相は、こうした点を一つ一つ解き明かす必要性を強く訴えているので
ある。

注

(1) 拙稿「黒人身体能力神話」浸透度の文化的格差をさぐる―概念規定と方法
論を中心に―『武蔵大学人文学会雑誌』第四〇巻第四号、一―二九頁参照。
この拙稿では「黒人身体能力」や「神話」という概念の規定に加え「黒人」
という呼称を採用する理由、調査の方法論、日米間の文化的格差の存在の
確認など、プロジェクトの立ち上げに必要な諸々の作業を行っている。

(2) ここで「アフリカ人」、「アフリカ系アメリカ人」、「黒人」などの呼称につ
いて整理しておきたい。「アフリカ人」は「アフリカを出自とするもの」、
「アフリカ系アメリカ人」は「アフリカに出自を有するもの、あるいはその

子孫で、アメリカ市民権を獲得したものをそれぞれ指し、「黒人」は上の両者を含むものとする。「黒人」は「肌が黒い人」の総称として用いられることもあるが、本論ではオーストラリアのアボリジニーや、南アジアの人々など褐色の肌をした人々を含まず、アフリカを出自とする人々に限定して用いるものとする。この用法は一般的に日本で流通しているものに近いと思われるので、敢えて「」で括らないで表記するものとする。

(3) 「人種」と表記する際に以下では「」を外して表記するが、本論は一貫して、「人種」に科学的根拠はないという現在の自然・社会科学者多数派の主張を支持する立場に立つことを明記しておく。

(4) 日本や韓国などでも、初等・中等教育という早期の段階でスポーツの英才教育を受けた人材が、青年に達してから伸び悩み、アスリートとしての進路を閉ざされてしまう事態についての調査が積み重ねられている。日本人や韓国人にとってアフリカ系アメリカ人の苦境は、対岸の火事とはいえないのが実情である。

(5) 本調査に関して更なる検討が必要とされる点の一つは、アンケートと聞き取りいずれにしても、インフォーマントの記憶に頼らざるを得ないことである。不確かな記憶に頼る調査の精度を向上させるために何をすべきかについての検討を留保しつつ、その記憶に頼ることを前提として、本調査が実施されたことを断っておく。実際に試みた対策の一つは、記憶している事項に関して、聞き取りで繰り返し、異なる角度から質問し、語り手の表情、話し方、その内容などから確かであることを、聞き手側の手ごたえとして掴み取るというものがある。むしろ主観的であり、客観的な保証がないことはいうまでもない。

(6) 「現実の」や「実際の」という日本語よりも、主体である個人が「現実的であると感じている」という主観性を強く含意する言葉として「リアルな」を用いる。このニュアンスを伴う英語の "real" をうまく表現する日本語が見当たらないので、少々きこちなくなるとの批判を覚悟の上で「リアルな」と表記する。以下「」は外して用いる。

(7) 宮本正興・松田基二『新書アフリカ史』講談社現代新書 一九九七年、一〇頁、岡倉登志・北川勝彦『日本アフリカ交流史 明治期から第二次世界大戦期まで』同文館 一九九三年、iv頁。

(8) 鈴木正行『日本の新聞におけるアフリカ報道 マクブライト委員会報告の今日的検証―外国通信社への記事依存度の変遷を視座にして―』学文社 二〇〇五年、一頁、三七六頁。

(9) 石田洋子『アフリカに見捨てられる日本』創成社新書 二五二〇〇八年、一頁。

(10) 戸田真紀子「Ⅲ. 日本人のもつアフリカのイメージ」川端正久編『アフリカと日本』勁草書房 一九九四年、四六頁。

(11) 同右、三九頁。

(12) ジョン・G・ラッセル『日本人の黒人観―問題は「ちびくろサンボ」だけではない』新評論 一九九一年、四八頁。

(13) こうした印象や理解を促す背景にある知名度の不足と否定的な評価の持続との間には、情報の不足が偏見や差別意識を存続させ、それがまた情報の不足をもたらすという悪循環が存在すると思われるが、それを断ち切るすべは今日なお見つからないままである。

(14) 興味深い指摘なので、原文を記載しておく。「[T] here is more genetic variation among Africans than between African and Eurasian populations." from "Chapter 14: Evidence for the 'natural east African athlete." by Robert A. Scott, et al in Yannis Pitsiadiis, et al, eds., *East African Running: Towards a Cross-Disciplinary Perspective* (London: Routledge, 2007), p. 265.

(15) 藤田みどり『アフリカ「発見」：日本におけるアフリカ像の変遷』岩波書店 二〇〇五年、二九六頁。

(16) この引用および以下に続く方法論については、注一の文献を参照。

(17) 日本人インフォーマントの選定と、アンケート、聞き取り両調査は、二〇〇五年五月から七月に実施した。他方、アメリカ人インフォーマントに関する同様の作業は、同年九月から二〇〇六年三月に私が客員研究員として滞在した大学で実施した。以下で述べるとおり、一大学からのみのサンプルは、より大きな社会を論じようとする際に大きな制約となることを否定できない。本研究は、この点を一つの理由として日本側についての議論を主として、アメリカ側についての事例を参考に留めている。

(18) 東京にある私立大学J1からの一八名、北陸にある元国立(独立法人)大学J2からの一二名、大阪にある私立大学J3からの四名から成る。三つの大学に籍を置く三四名は、二年次から四年次の男性一一人と女性二三人からなり、調査時の年齢は一九歳から二二歳、高校まで過ごした土地は、関東、北陸、東海、近畿、中国五地方に位置する一二都府県とさまざまである。

(19) A1は、北東部にある私立大学である。

(20) 本研究の制約および限界について付言しておく。本研究が限られたサンプルに基づく試験的な試みにすぎないことはいうまでもない。その意図は、日本社会の一般の特徴を議論することにあるのではない。(もちろんいかに厳密なサンプリングを行っても、社会や国家全体を論じることができるか

に疑問は残る。しかし、このような質的調査であつても、現状よりは一般性を高める方策はあるものと考ええる。引き続き検討していきたい。)本研究の目的はあくまでも、それぞれの社会に生きるインフォーマントから得られるデータに基づいて、比較文化的な試論を提起することである。殊に、アメリカ人インフォーマントがみな一つの大学に所属し、その数も少ないことに鑑み、分析の主眼は日本の側に据え、アメリカの事例は参考として提示する方針で一貫するものとする。(アメリカ人インフォーマント二名は、一名の女性と一〇の男性からなり、八つのエスニック集団に所属し、一三の州・国家からの出身者からなる。その意味で多種多様な背景を負った人々である。しかし全員が一つの大学に在籍していることも事実である。したがって、これらのインフォーマントから得られる情報は、同大学のレベルやカラーを反映したものであることは否定できない。)同様に、人数と所属する大学数が若干多いとはいえ、日本人インフォーマントの経験が日本人や日本社会一般に敷衍しうる性質のものであるという根拠は存在しない。本論の射程が、アメリカの一大学と日本の三大学に所属する学生の経験に限られるものであることはいうまでもない。かく留保した上で、本研究の分析が、より大きな世界における言説や表象の浸透や受容の度合を考察するための、より精緻な方法論に基づいた作業にとつての端緒を開くものとなることを期待したい。

(21) 以下の議論は、次の文献を参考にしてゐる。G. Levinger (レヴィンジャー) & D. J. Shoek (スノーク) *Attraction in relationships: A new look at interpersonal attraction* (General Learning Press, 1972)、堀洋道他編著『新編社会心理学』福村出版一九九七年、一四一―一五頁、末永俊郎・安藤清志編『現代社会心理学』東京大学出版会一九九八年、一〇四―一〇五頁、大坊郁夫・奥田秀宇編『親密な対人関係の科学』誠信書房一九九六年、二九―三〇頁。

(22) 「会う」行爲と「話をする」行爲はだいたいにおいて同時に発生するが、インフォーマントの語りからは、例えば友人とバーに行き、そこで一緒になった黒人と飲んだが、一切話をしなかった場合のように、「会う」機会と「話をする」機会が一致しないケースも確認できた。したがってアンケートや聞き取りでこの区別を設けることは無意味ではないと考えた。

(23) アンケートでの質問の記述は以下のとおりである。なおアンケートで試みた「黒人」と「アフリカ系の人」に関する呼称上の配慮については次の注を参照。

いままでアフリカ系の人と、あなたがどのような関係にあつたかについて質問します。あてはまるものすべてを選び、その番号を回答記入欄に記入

してください。

- 一 見かけたことがある
- 二 会ったことがある
- 三 話をしたことがある
- 四 知人にアフリカ系の人がいる
- 五 友人にアフリカ系の人がいる
- 六 親戚や家族にアフリカ系の人がいる
- 七 その他

(24) アンケートでおこなった呼称上の配慮について説明しておく。日本人の日常会話で「黒人」なる呼称が流通している事情は上に述べた(注二)が、この事実を鑑み、アンケートでは最初は「黒人」を用いざるをえなかった。しかし、途中で次のような文章を挿入し、「黒人」を「アフリカ系の人」と言い換える旨説明した。「アフリカ系の出自をもつ人々を、日本では一般に『黒人』と呼ぶことが多いのですが、以下では、『黒人』に該当する人を『アフリカ系の人』と呼ぶことにします。例えばアメリカ合衆国では、市民権を有する『黒人』を『アフリカ系アメリカ人も、アフリカ系の人』に含めます。」この解説の有効性・有用性および適正さについて(これが人種を表象する文言が引き起こす問題を回避する手段として最適かどうかは)更なる検討に付されなければならぬが、とりあえず、こうすることによって人種偏見などの弊害を招く可能性を排除する努力あるいは教育的配慮を志したことを申し添えておく。また、以下に引用するインフォーマントの語りに、「黒人」や「アフリカ系の人」という表現が混在するのは、アンケートで与えた説明が一因であるといえよう。

(25) 次の注で言及する歌舞伎町のナイジェリア人に関する報道はその一例である。

(26) インフォーマントの中にはいなかったが、現在の日本では家族や親戚にアフリカ系の人を珍しくなくつつあるようである。『朝日新聞』による歌舞伎町におけるナイジェリア人に関する報道(二〇〇七年一月二十九日―三月二日)によれば、ナイジェリア人の男性と結婚する日本人女性が増えているとのことである。政治的弾圧や乏しい経済的成功の機会などの理由で、祖国を後にしたナイジェリア人たちは、仕事を求めて来日し、歌舞伎町に流れ着き、いわゆる「ぼったくりバー」の客引きとして働くようになったという。その店舗数は二〇前後、客引きは六〇人前後にのぼるとされる。ナイジェリア人たちは永住資格を得て、強制退去の心配をなくすために、日本人女性との結婚を勧められた。彼らの多くは、こうして便宜的な結婚

を実現させ、子供をもうけるに至った。このようなナイジェリア人たちを逮捕し、取り調べた警察は、彼らに、日本人妻子の生活を心配する様子がみられないことに驚かされたという。家族に対する無関心、冷淡、切実さと誠実さの欠如を目の当たりにして、刑事は自問したという。「日本人とは考え方の尺度がちがうのか」「理解不可能な異人種」なのかと。この事例は、残念かつ不幸なことに、たとえ夫婦関係という強い絆が作られたとしても、その絆が、ステレオタイプを打破するよりは、むしろ助長するような風潮に結びついていく可能性を垣間見せている。しかしそれよりも、外国人労働者をそのような状況に追いやる経済構造や社会秩序をこそ憂えるべきであろう。

(27)

「知人」として記憶している相手は、いろいろあつた関係のなかで良い思い出だったがゆえに記憶に残っているのでは、だから「知人」との経験をよいものとみなすのは当然では、というような反論も考えられる。しかし、「知人になる」段階でのネガティブな経験の報告が皆無であるという事実は、やはり重く受けとめるべきであろう。むしろ、ネガティブな事例はさらに調査すれば出てくるだろうが、そこにもステレオタイプの届かない、人と人のリアルな交流・やりとりが存在している可能性は少なくない。

(28)

ブラウンによれば、「ある人をステレオタイプ化するということは、その人の所属団体の成員全員もしくは大部分が共有しているとみなされている諸特性を、その人も備えているとみなすこと」であるとされる。そしてそれを破る契機を、本文で述べたように定義しているのである。R・ブラウン(橋口捷久、黒川正流編訳)『偏見の社会心理学』北大路書房一九九九年、八二頁参照。